

じっくり内容を考えることができるが、ビデオだと一度回したら止まらず、一見無駄な時間も映る。しかし実は言っている内容よりも、そういった自分の仕草や表情が未来に残ることが面白い」そうだ。七年間という時間設定も、十年だと長すぎてイメージがわからず、逆に三年後だと近すぎるので、七年という時間設定にしようと思ったと

その後、ビデオ撮影を行ったために海岸に向かった。この日は波も高く風も強かつたため、波が撮影機材にかかりそうになり、撮影場所を移動すると、いつた様子であつたが、講師の山城氏が非常に気さくな方であつたので、終始リラックスムードで無事に終えることができた。

幼い頃、あなたはタイン埋めたことがあるだろう物や大切にしているものを何年か後に掘り起こす。さて、一年も最後の月七日、映像ディレクタ氏による三宅島大学の講堂で「撮影しよう」が行なわれる。座が行なわれるのは今回で、年後の自分にビデオレターネットで書いている途中に、

幼い頃、あなたはタイムカプセルを埋めたことがあるだろうか？自分の宝物や大切にしているものを埋め、それを何年か後に掘り起す。

さて、一年も最後の月を迎えた十二月七日、映像ディレクターの山城大督氏による三宅島大学の講座「ビデオレターを撮影しよう」が行われた。当講座が行われるのは今回で三回目で、七年後の自分にビデオレター撮影して送るという内容であり、既に十五人ほどの人たちが撮影したそうだ。ビデオレターとは、読んで字のごとくビデオで撮る手紙である。山城氏いわく「手紙だと書いている途中にペンを止めて

今と昔をつなぐモノ



2013年
(平成25年)
12月8日
日曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
<http://ashitaban.net/>

第四十五号

メッセージや何かを伝えるといふことはないので、何を話してどう伝えるか非常に苦労した。しかし、未来的の自分が思いを馳せ、メッセージを伝えるとい

うことは、同時に必ず比較対象である。今の自分のことを振り返ることにならぬ。そういった意味で、自分を見つめ直すとても良い機会になり、同時にこのビデオレターを見た七年後の自分にとっても、過ぎ去った日々を振り返り自分を見つめ直すきっかけとなつてしまふ。さればと思つた。

(長富將成



目の前でボヌエールを広げて見せると、大きく写し出された自分を見て、「もつとちゃんとしどけば良かった」と照れ笑いを浮かべる磯谷氏。隣にいる妻の磯谷麻美氏も笑っている。「私たち、喧嘩減ったの?」と周りの人が声がら、喧嘩減ったの?と

るのは、とても嬉しいことである。完成して一番に見せたい相手は、やはりポスターに写っているひとであることは間違いないだろう。

てくれるたゞ、たゞか　詰を正しく解
できていたどうかとか、いろいろ考
えててしまう。しかしじちらにせよ
A1サイズになつたポスターを目の当
たりここ又心を直接見ることができ

ポスターを手渡す瞬間は、何度経験しても緊張するものである。気に入つてしまつたが、またこうして再会することができて嬉しく思う。

それから二週間経った十一月一日
阿古船客待合所ここばーとの一階、三
宅島観光協会事務所にて取材した磯谷
泰斗氏に、A1サイズに印刷した完成
版のポスターを手渡しに行くことがで
きた。前回の滞在から少々時間があい

一〇二三年十一月十五日から十七日、加藤文俊研究室が三宅島に滞在し、「はたらく男の人」ポスターを制作した。今回は観光協会、ココナツガーデン、ホテル海楽の三件に取材をしそれぞれ二枚ずつ、計六枚のポスターが並んだ。

手渡すまで



な時間を、ポスターという形にしてマウントする。それを手渡す度に「またすぐに来ます」と言つて別れるのである。

(青山大毅

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。



二〇一三年十一月二八日、昨年六月から数え、十回目の三宅島へ向かう。冬の寒さのせいか、デッキにひとの姿は見えない。汽笛が鳴り、出港する。いつもなら酒を飲む頃だが、レインボーブリッジの真下を通り過ぎたところで船室へ。本を読み、眠気を待つた。船がギイギイと音を鳴らしながら揺れ、目が覚めてしまう。冬の海は荒れると聞いていたが、想像以上だった。安が押し寄せてくる。時刻は深夜二時半。まだ、三宅島は遠い。

「パリン」という破裂音。続いて、アルコールの強い臭い。どうやら、船の揺れによって酒瓶が落ち、割れたようである。日本酒だろうか。臭いだけで酔つ払ってしまう。数分後、また大きな物音がした。これ

二〇一三年十一月二八日、昨年六月から数え、十回目の三宅島へ向かう。冬の寒さのせいか、デッキにひとの姿は見えない。汽笛が鳴り、出港する。いつもなら酒を飲む頃だが、レインボーブリッジの真下を通り過ぎたところで船室へ。本を読み、眠気を待つた。船がギイギイと音を鳴らしながら揺れ、目が覚めてしまう。冬の海は荒れると聞いていたが、想像以上だった。安が押し寄せてくる。時刻は深夜二時半。まだ、三宅島は遠い。

ひとり

青山 大毅

三宅島工ツセイ
島びより

は、わたしのキャリーバッグが落ちた音だろう。着いたら直そう。何度目の自覚めだろうか。ようやく到着の船内放送が流れる。カーテンを開けると、そこには誰かが直してくれたであろうキャリーバッグが立っていた。

下船すると、強烈な風が襲ってくる。内地より寒い。向こうで手を降っているのは、三宅島大学マネージャーの上地里佳さん。思わず駆け寄る。頂いたカフェオレが暖かかった。

下がつかりと編まれている。聞けば、の上地里佳さんは、思わず駆け寄る。頂いたカフェオレが暖かかった。

編み続ける人

三宅島大学本校舎に入つて右手を見ると、ふと目に留まる赤と黒のハンモック、更に進むともう三つほどぶら下がつかりと編まれている。聞けば、四つのハンモック全て同じ人が編んだそうだ。編んだ人の名は、阿古に住む元三宅島漁業組合長の沖山邦男さん。

三宅島大学の講座である「ポスターを作ろう」のポスター・モデルをしたり、そらあみプロジェクトに関わったりして、「クニさん」の愛称で親しまれている。

クニさんは元々式根島出身で、テングサを取るために三宅島に移り住んだ。なんと一回の漁で十トン近くの魚を揚げることもあった。その一方で、一度網を上げ始めたらどんなに波が強くても上げなくてはならず、また、夜の漁では波が見えないために危険も伴つた。そうだ。

「テングサ景気」と呼ばれた頃には、組合員と一緒にジエット機を一台貸切つて温泉旅行に出かけることもあつた。飛行場を建設する際に当時の組合長らと採めた時は、組合員を取りまとめ、組合員からの信頼を築いた。その後一九九九年から漁業組合長を二年間務め、全島避難の際は下田や大



(長富将成)

雨の日も風の日も、毎日毎日阿古を散歩して黙々と網を編み続けるクニさん。一漁師として、一組合長として今までどれだけの苦労や困難に直面して乗り越えてきたのだろうか。本当に様々な経験を積んだのだろう。帰り際、もつと色々な話を伺つてみたいと思いつつ家路に着くクニさんを見送ると、だんだん小さくなつていくクニさんの背中がとても大きく見えた。

島等各地に避難した組合員の元を一人一人訪問して話したり、励ましたりしたそうだ。しかし、避難解除の後に多くの若手漁師が島に帰らず、そのまま不足により網の漁ができるなくなる事態にもわたって島の漁業組合の中心として支えてきた。

お知らせ



POSTCARD

バノチカ
vanotica

主催：慶應義塾大学 加藤文俊研究室

加藤文俊 尾内志帆 司都斐 ジイヌ・ム 南山大毅
大川 鮎野結衣 横濱絵里花 竹下潤 長尾慶祥
長富将成 康野吉隆 吉野あんじ 和田勇人 伊藤圭
河村裕次郎 真原雅子 田中徹里 深澤匠 山口祐加
秋庭大志郎 井上千聖 小川健太 小林ゆる 齋藤崇
羽井和二郎 中野彩也香 原田ひづみ 細井美香
堀越一晴 植野友香 田畠晴香

2014.02.01(土) - 04(火)
11:00~18:00 (最終日 11:00~15:00)
<http://vanotica.net/fw1010/>

会場：YCC・ヨコハマ創造都市センター
〒231-8315 横浜市中区赤レンガ6-501
Tel. 045-221-0325
みなとみらい線「馬車道駅」1b出口
JR・市営地下鉄「桜木町駅」徒歩5分

ライン

2014年1月11日(土)於 御蔵島会館
映画試写会を行ないます。
どなたさまも、是非いらしてください。

わたしは、三宅島でひとりの少年とただちになりました。島のことをはじめ、焦る天気のことなど、たくさんのことと彼は話してくれます。一緒に過ごした時間はいでも思ひ出せるように、彼とわざをつなくモノになるように、この映像作品をつくりました。彼に贈る、彼とわたしのドキュメンタリーです。